

## 視能訓練士学科（昼間3年制）

### 養成目的

昭和46年に視能訓練士法が制定されて以来、視能訓練士は主に小児の斜視・弱視の検査・訓練・治療を中心に、大学病院や国公立病院・総合病院において活躍してきた。高齢化社会の現代、眼科における受診者の数は増加傾向にあり、またパソコンやゲームなどの使用により、現代人ならではの眼の病気も増えてきており、業務内容は斜視・弱視の検査訓練に加え、一般眼科検査にまで広がった。さらには中途視覚障がい者リハビリテーション領域まで拡大してきている。医療の高度化と高齢化社会の今日、医療の目的が疾患の治療だけではなく、疾患を有する患者のQOL向上へと変化してきている。また近年、検査機器はますます精度を増し、より速くより精密に検査できるようになってきた。よって視能訓練士には、高度な検査技術、疾患との関わりを考察推論する力、患者様との対話力も含めたトータルのサポートとケアができることが求められている。

本学科では3年制養成課程の中で、実学教育・人間教育・国際教育の教育理念に基づき、視能訓練士として必要な基礎教養科目をはじめ、専門科目も基礎から段階的にステップアップできる充実したカリキュラムを組んでいる。また、「職業実践専門課程」として業界と連携し、実践的かつより専門的な能力を育成し、医療の高度化と高齢化社会という多様化するこれからの社会に対応でき、卒業後も変革していく眼科医療の中で活躍していけるよう、常に研鑽し向上心をもった人間性豊かな視能訓練士を育てることを目的とする。

### 養成目標

（初年次基礎期：1年次）

- ・新入生研修、面談、ホームルームなどを通じ、社会人としてのマナーや生活習慣、規律を身につける。
- ・学外学習、ボランティア活動での主体的な学びを通して、汎用的能力を育てる。
- ・「基礎教養Ⅰ・Ⅱ」を設定し、身近な時事問題を通して「読む・書く」の基礎学力を付ける。
- ・「人間関係論Ⅰ・Ⅱ」を設定し、医療人としてのマナー、言葉遣い、患者とのコミュニケーション力、説明力、人間力を身につける。
- ・基礎分野、専門基礎分野の学習を通して、毎回の授業で小テストを実施することにより、視能訓練士としての専門基礎の定着を目指し、学習習慣を身に付ける。
- ・外国人講師による英語教育を通して、海外研修や原著論文講読、外国人患者にも対応できる語学力と国際感覚の基礎を養う。

（専門教育期・臨地実習Ⅱ期：2年次）

- ・キャリア教育を通して、社会的・職業的自立に向け、基盤となる能力や態度を育てる。
- ・「視能検査学実習Ⅰ・Ⅱ」を設定し、臨床家による講義や実技指導、検影法実技マイスター教育を通し、視能訓練士としての特殊技術習得を目指す。
- ・「視能検査学総合実習Ⅰ」を設定し、他学科を交えたチーム医療学習、医療面接 OSCE を通して、臨床における視能訓練士の全体像を学ぶ。
- ・「視能検査学総合実習Ⅱ」を設定し、学内外でのアクティブラーニング（実習前実技試験、幼稚園・保育園

実習など)を通し、臨床で役立つ総合的な考察力、実践力を習得する。また、発展していく医療技術や機器の知識を習得するため、産業界と協力し、時代に即した検査技術を習得する。

- ・「医療事務総論演習Ⅰ・Ⅱ」を設定し、医療事務を学ぶことにより、常にコスト意識をもって診療業務に取り組むことができる医療人としての姿勢を養い、「医科医療コンピュータ2級」を取得する。

(臨地実習Ⅲ期、卒業研究、国家試験対策：3年次)

- ・海外研修を通して、現地学生との交流を通し、グローバルな視点で視能訓練士の立場と役割を理解し、国際感覚を養う。
- ・405時間の臨地実習を通し、知識や技術の更なる向上を目指し、自ら考え行動できる臨床力を習得する。また、卒業後に患者へのトータル的なサポートとケアをする為の礎を築く。
- ・「卒業研究」を設定し、研究方法の基礎を学び、計画、実験、分析などを通し、エビデンスに基づいた研究の意義や重要性を学ぶ。
- ・教員の専門性を活かした専門教育授業で実力を伸ばし、ひとりひとりにあった個別指導や、滋慶グループ内の統一模擬試験など包括的指導を通じ、全ての学生が国家試験合格を目指す。

## 取得目標資格

視能訓練士（国家資格）（卒業時に受験資格取得）

医科医療コンピュータ2級（日本医療事務検定協会認定）

視覚障害者ガイドヘルパー（大阪府指定 同行援助従事者養成研修）

## 就職分野

大学病院、総合病院、一般病院、眼科専門病院、眼科医院

## 職 種

視能訓練士